

モンゴル人民党第一回大会とブリヤート人革命家たち

二 木 博 史

一 はじめに

モンゴルの高名な言語学者・民族学者・作家B・リンチェンは、その死後刊行された短い自伝(一九七四年執筆)のなかで、一九二一年三月のはじめに、極東共和国領トロイツコサフスクの父ビムバエフの家でモンゴル人民党第一回大会がひらかれたこと、自ら会議の代表の世話をしたことを回想している⁽¹⁾。

ところが、この会議がソビエトロシア全権代表マクステネクの公邸でひらかれたとする記述も、いくつかの研究書のなかにみられる⁽²⁾。

第一回党大会が、デードシベー(トロイツコサフスクのモンゴル名)のビヤムバジャブ(ビムバエフ)の邸宅

で開催されたことは、すでに一九二八年刊の『モンゴル人民革命党史資料集』所収の、党書記ゲレクセンゲの書いた「党委員会・党細胞の誕生と発展」に述べられており、疑問の余地はない⁽³⁾。実は、ある時期にトロイツコサフスクの中心にある建物(マクステネク邸)を会議の場所にきめ、博物館にしまったのである⁽⁴⁾。

この事例に代表されるように、社会主義時代に刊行された、第一回党大会に関する資料は、一九七一年刊の資料集を別にすると、改竄されたものや一部削除されたものが多い。

その意味で、一九九六年に刊行された『モンゴルの革命家の歴史的大会』(Монголын хувьсгалчдын түүхт зөвлөгөөн)と題する資料集は、モンゴル人民党

第一回大会の基本的な資料を網羅したもので、資料的価値がきわめてたかい。とくにこれまで部分的にしか刊行されていなかった、ロシア語で記録された議事録の全文が出版されたことにより、いくつかの新しい事実があきらかにされた。

この資料集にふされた解説のなかで、とりわけ注目すべき見解は、三月一日、二日の会議と三月三日の会議は性格がことなり、三月三日の会議のみ、厳密な意味でのモンゴル人民党第一回大会とよびうるといふ意見である。

この意見の根拠になっているのは、三月一日、二日の会議の議事録と三月三日の会議の議事録が別々に作成され、異なるタイトルがあたえられていること、三月三日の会議では純粹に党に関わる問題のみ討議されたことなどである。⁽⁵⁾この考え方は説得力があり、定説になるであろう。

さて三月三日の会議に参加した二十六名のモンゴル人民党員のうち、五名はブリヤート人モンゴル人であった。すなわちジャムツァラーノ夫妻（ツエウエーンシジャムツァラーノと夫人のパドマジャブ）と、バラムソー、ツエデンイシの兄弟とジャムバロン（サンダグドルジ）である。ジャムツァラーノは、三月三日に承認された党の

綱領を起草した。⁽⁶⁾ジャムツァラーノ夫妻とバラムソーは、このあと数ヵ月後にはモンゴル人民党の代表としてコミンテルン第三回大会に参加するためモスクワへおもむく。ジャムバロンは前年の秋にモンゴル人民党代表団にくわり、ダンザン、チャグダルジャブ、リンチノとともにモスクワを訪れている。ツエデンイシは前年の夏にボリソフと一緒にフレー（現オランパンバル）を訪問し、モンゴル人民党のメンバーに会い、その活動をたすけ、ボドー、チャグダルジャブのウエルフネウディンスク（現ウランウデ）行きに同行した。

このようにこれらブリヤート人活動家が一九二一年革命ではたした役割には顕著なものがある。かれらがコミンテルンの機関に属していたゆえ、かれらの活動はコミンテルンを介したソビエトロシアの指令によるものと解釈されることがおこった。

本稿では、モンゴル人民党がソビエトロシアに援助を要請した時期（一九二〇年夏）から第一回党大会までの、モンゴル人民党の活動、ソビエトロシア、コミンテルンの対モンゴル政策を検討しつつ、当時の非ポリシエヴィキのブリヤート人革命家の行動を考察したいとお

もう。

従来、この時期の資料としては、第一回党大会の議事録以外には、右記一九二八年刊の『モンゴル人民革命党史資料集』所収のバラムソーの回想、一九三一年刊のデムベレルの記録くらいしかなかった。最近、ロシアでながい間、機密あつかいだったコミンテルン関係の文書の閲覧が可能になり、コミンテルンとモンゴルの関係に関する主要な文書がモンゴル語に翻訳され、資料集『コミンテルンとモンゴル』(Коминтерн ба Монгол)として出版された。この資料集におさめられた、一九二〇、二十一年の資料は、本稿のテーマにとってたいへん有用である。また筆者が一九九七年八月と一九九八年三月にオンラインバータルのモンゴル歴史中央文書館で閲覧した、同資料集に未収録のロシア語の文書(モスクワで複写され同文書館に所蔵されている資料)も本稿で使用した。

二 ソビエトリロシアの対モンゴル活動の

機関の変遷

対モンゴル活動の機関であるロシア共産党中央委員会シベリア局付設東方諸民族部モンゴル・チベット課(課

長ボリソフ)に参事会(коллеция)が設置されたのは、モンゴル人民党代表団七名がイルクーツクに到着した四日後の一九二〇年八月二十日のことだった。ボドーとチヨイバルサンも参加した同日の会議では、リンチノ、ボリソフ、ニコラエフが、それぞれ参事会の議長、副議長、書記にえらばれた。役割分担もきめられ、リンチノ、ツエデンイシ(ダシビロフ)、ボリソフがそれぞれ、宣伝、組織、情報部門の責任者にえらばれた。⁽¹⁾

この日の会議では、ジャムツァラーノ(ベグゼエフ)をモンゴル・チベット課の代表としてフレヘ、バラムソー(ワンチコフ)を連絡役としてモンゴルキヤフタへそれぞれ派遣することもしめられた。

中国、朝鮮、日本、モンゴル、チベットに対する活動を任務とする東方諸民族部自体は、ソビエトリロシア外務人民委員部シベリア代表部付設アジア局を改編するあたりで、同年七月二十七日に組織され、ブルトマン、ガボンが、それぞれ部長、副部長をつとめた。この東方諸民族部は、翌一九二一年一月にコミンテルンの極東書記局に再編成されることになるが、その間の東方諸民族部とコミンテルンの関係は、これまであまりあきらかでは

なかった。『コミンテルンとモンゴル』の資料解説のなかに引用された、シベリア局書記ゴンチャロフがコミンテルン執行委員会議長ジノヴィエフにおくった書簡のなかには、東方諸民族部の活動に関する三つの提案がなされている。すなわち、第一に、シベリア局が東方の諸民族に対する活動においてコミンテルンを代表する、第二に、外務人民委員部やコミンテルンから派遣されて東方諸国で活動している活動家を東方諸民族部に統合する、第三に、東方諸民族部の指導者が東方の諸民族に対する活動において、外務人民委員部を代表する⁽⁸⁾。

これらの提案が実際にうけ入れられたのかどうかは、明白でないが、東方諸民族部が、コミンテルンと一定の関係を有していたことは、資料のうえからうたがいない。

一九二〇年十一月二十五日に東方諸民族部がコミンテルン執行委員会におくった報告は、ロシア共産党極東局による、東方諸民族部に対する干渉・妨害をのべるとともに、シベリア局が東方諸民族部の活動を単に中央に伝達するだけで、その活動に注意を払っていないことを理由に、コミンテルンの一機関として活動したいという希望を表明している。この前日の十一月二十四日の会議で

は、コミンテルンの管轄下に移行した場合の具体的な機構、構成員に関する決定もだされていた。このなかには、すでに責任者としてシュミヤツキーの名前があげられ、モンゴルリチベット部長の候補者としては、ボリソフの名前がみられる⁽⁹⁾。

これらの文書は、東方諸民族部が、ルズヤニンのいうような、「革命」を輸出するためのコミンテルンの「支部」⁽¹⁰⁾ではなく、ロシア共産党、コミンテルンのいずれにも直属しない、ある意味では「半独立」の機関の性格を有していたことを示していると、解釈することができる。このように解釈することによって、非ボリシェヴィキのリンチノやジャムツァラーノやツェデンイシが、東方諸民族部の対モンゴル活動を事実上、担ったことの説明が可能になる。そして、このような東方諸民族部の性格は、コミンテルン極東書記局に改編されたあとも、一定期間たもたれたのではないかと、わたしは考えている。

一九二一年一月のロシア共産党中央委員会の決議で、シベリア局付設東方諸民族部はコミンテルンに移管された。コミンテルン執行委員会東方局のもとにイルクーツクに極東書記局が誕生することになった。

厳密に言えば、コミンテルン極東書記局(Дальневосточный секретариат Коминтерна)の名称は、すでに導入されたわけではないようだ。一九二一年二月十日の文書では、「コミンテルン極東代表部」(Дальневосточное представительство)の表現がつかわれている。⁽¹¹⁾

モンゴルを管轄する部署の名称も途中でかわっていることが、文書資料から確認される。二一年二月二十二日の文書では「モンゴル・チベット課」(Монголо-тибетский отдел)とあるが、三月五日の極東書記局の文書では「モンゴル・チベット部」(Монголо-тибетская секция)という名前がみられる。さらに六月二十日の文書では、チベットがとれて、「モンゴル部」(Монгольская секция)になっている。⁽¹²⁾

これらの名前の変化、すなわち機構の変遷は、その時点での状況の変化によってなされたとおもわれる。対モンゴル政策が、白衛軍の脅威の増大にともない、より重視され、モンゴルのみをあつかう部署がつくられたとみてよいだろう。

三 バロン＝ウンゲルン軍の侵入後の状況

バロン＝ウンゲルンのフレール攻撃の報をうけ、一九二〇年十月二十九日に東方諸民族部執行部とモンゴル・チベット課の緊急合同会議がひらかれた。主要な議題は、白軍との戦闘のために、モンゴルにソビエト＝ロシア軍を派遣する問題と、臨時モンゴル政府を樹立する問題であった。

ボリソフの報告によると、モンゴル代表団のメンバーは、ウンゲルン軍に対してそれほど危機感をもっていなかった。それに対して、ボリソフ自身は、ウンゲルンがさまざまな白軍分子を結集して一大勢力になり、ソビエト＝ロシアにとっての「モンゴル前線」が生じる可能性を指摘し、ハトガル、ワンギーン＝フレールなど、白軍のモンゴル内の拠点を破壊する作戦を提案した。そのためには、モンゴル・チベット課のスタッフとモンゴル代表団をモンゴルへおくり、宣伝活動をおこない、パルチザン部隊を組織する必要があると、ボリソフは主張した。⁽¹³⁾

ツェデンイシは、まずモンゴル自治政府を組織し、モンゴル政府の要請にもとづき、ソビエト＝ロシア軍の派

遣がなされるべきだという意見をのべた。彼は、臨時政府の構成員の候補者として、ツェレンドルジヤハタンバール・マクサルジャブの名前をあげている。⁽¹⁴⁾

この日(十月二十九日)の会議で、ソビエト・ロシア軍をモンゴルへ派遣すること、臨時政府樹立の必要性をモンゴル代表団につたえること、ニコラエフ以外のモンゴル・チベット課のスタッフ全員をトロイツコサフスクに派遣することが決議された。

同年十一月二日、モンゴル代表団は、ソビエト・ロシア外務人民委員部代表と東方諸民族部モンゴル・チベット課あてに、ソビエト・ロシア軍の派遣を要請する書簡をおくっている。⁽¹⁵⁾この書簡は、前記会議の決定にもとづくとみるのが、自然であろう。⁽¹⁶⁾

右の決議にもとづき、まもなくポリソフ、ツェデンイシ、ロソル、チャグダルジャブが、キャフタ北方数キロの、当時の極東共和国領のトロイツコサフスクへ向かった(スフバートルとチョイバルサンは、それよりすこしまえに出発していた)。

ツェデンイシ(ゴチツキ)が、十一月二十九日に、東方諸民族部モンゴル・チベット課におくった報告は、

ウンゲルン軍の第一次攻撃後のフレーの状況、特にフレーでのモンゴル人民党の活動状況をよくつたえる。⁽¹⁷⁾

ロシアからもどったボドーとドクソムのうち、ボドーは首都から遠ざかり、ドクソムはフレーの近くにとどまり、他のメンバーと連絡をたもっていた。当時、フレーで活動していた人民党の指導者には、デンデブ、ドガルジャブ、ガルサンと、ブリヤート人のバルサノフ、ユムタロフ、バラコフがいた。⁽¹⁸⁾

より正確な情報をえるために、フレーへチョイバルサンとスフバートルを派遣することが、予定されていた。

このツェデンイシの報告で特に注目すべきは、チョイバルサンとスフバートルのほかに、ジャムツアラーノ(ベグゼーエフ)、バラムソー(ワンチコフ)、それにマイマーチェン(モンゴル領キャフタ)からの代表が参加して、新情勢に対応した行動計画をたてるための会議がひらかれたことだ。この会議で、モンゴルは当面は、中国が軍隊を撤兵し自己の総督をモンゴルへ派遣するという前提で、中華民国内の自治国のステータスを獲得すべきだという結論に達した。このためには、ソビエト・ロシアと極東共和国による支援、中国政府への働きかけが

必要だと考えられた。⁽¹⁹⁾

会議では、バルガ(フルンポイル)へ人を派遣してウーゲルン軍の情報をさぐらせること、中国軍兵士間(旧正規軍の兵士、シューーシージェン「徐樹錚」軍に所属していた兵隊、新たに動員された兵士)の相互不信を利用すべきことも、議論された。

さらに内モンゴルのチャハルからモンゴル人部隊を動員しジャンジャーコウ(張家口)とペキンとの連絡をたちきること、ペキンやシャンハイの外国の報道機関に働きかけ中国軍の専横を訴え、モンゴルにとって有利な国際世論をつくりだすべきことなども、報告に述べられている。

この報告に述べられた意見のおおくが、イルクーツクで承認されたことは、つぎにとりあげる資料から明白である。

十二月の前半に、東方諸民族部執行部とモンゴル・チベット課の合同会議がひらかれた。⁽²⁰⁾ 議事録によると、出席者はブルトマン、ガボン、リンチノ、ダンチノフ、バルダエフ、ツイレンジャボフ、イシドルジン、ダンザンの八名で、ブルトマンが議長をつとめた。十一月なかば

にリンチノとともにモスクワからもどったモンゴル代表団長のダンザンが出席しているのが、特に注目される。またモンゴル・チベット課のスタッフが、この間にふえていることも確認される。

会議では、十一の議題がとりあげられ、それぞれ決議がなされた。このうち、第一、四、五の議題は、ツェデンイシの報告と直接関係がある。第十の議題(パシキル人やタタール人などからなるウーゲルン軍の解体のための方策)⁽²¹⁾に関する決議は、ツェデンイシ報告の内容とはほぼ一致する。ツェデンイシの提言、もっと正確には、トロイツコサフスクでの会議の決定がそのままイルクーツクの東方諸民族部やモンゴル・チベット課によってうけいれられたことがわかる。

第一の議題は、「モンゴルの状況」と「中国帝国主義との対抗のためのモンゴル民族の統一戦線(единный монгольский национальный фронт)の構築」の問題だった。ツェデンイシの報告のなかでは、「モンゴルのすべての階層の統一(объединение всех кругов Монголии)」の表現がつかわれていた。⁽²²⁾

会議の決議によれば、この問題に関する提案書の作成

がリンチノにゆだねられ、十二月十八日の東方諸民族部執行部とモンゴル・チベット課の合同会議であらためて議論されることになった(合同会議は実際には十二月二十一日にひらかれ、リンチノの案が承認された)。

この会議の決議で特に注目すべきは、モンゴル人バルチザン部隊の創設と武器の供給、教官の派遣に関する部分である。決議の第二号によれば、赤軍第五軍へ提出する報告書の作成がモンゴル・チベット課にゆだねられた。議題の第六は、モンゴル人バルチザン軍部隊を支援するため、ブリヤート⁽²³⁾リモンゴル人を動員する問題だが、この動員が「モンゴル人民革命党に対するモスクワの約束」にもとづくものだ⁽²³⁾と説明しているのが、注意をひく。バルチザン軍部隊の創設に関するこれらの報告・決議の内容を検討すると、バルチザン軍部隊の編成の方針が、この時点(一九二〇年十二月)ではじめて正式にきめられたことがわかる。

一方、モンゴル国境方面における、モンゴル人民党、モンゴル・チベット課のスタッフの動向に目をうつすと、まさにこの頃から、モンゴル人民党軍を組織するための具体的な行動がはじまっていた。

ボドーやドクソムとの連絡がむずかしくなった状況のなかで、最初に考えられたのは、新疆出身の民族主義者ソミヤール⁽²⁴⁾ペイセを党の活動に引き入れることだった。デムベレルの回想によれば、チャグダルジャブとチョイバルサンが、ソミヤール⁽²⁴⁾ペイセ、デムベレル兄弟のもとを訪れたのは、一九二〇年十二月十九日である。まもなくデムベレルは国境をこえ、ゲゲーティーン⁽²⁴⁾ダツァン(寺)へ行き、革命家たちと合流した。この頃(二〇年十二月末か、二一年一月はじめ)、ゲゲーティーン⁽²⁴⁾ダツァンには、ダンザン、スフバートル、チョイバルサン、チャグダルジャブ、ポリソフ、ツエデンイシ、バダム(ワシリエフ)らがいたという。パラムソーは、当初ゲゲーティーン⁽²⁴⁾ダツァンで党大会がひらかれる予定だった⁽²⁵⁾と⁽²⁵⁾かいている。

一九二一年一月二十四日(旧暦十二月十五日)には、ウンゲルン軍のなかに潜入したボドーと連絡をとらせるため、ツエデンイシを派遣することがきまり、ただちに実行された。ツエデンイシは、二一年二月四日のパロン⁽²⁶⁾ウンゲルン軍によるフレ⁽²⁶⁾占領の報をたずさえてまもなくもどってきた。ウンゲルン軍におわれてキャフタ方

面にのがれた中国軍は、モンゴル人住民にとってきわめて危険な存在になっていた。

二月十六日(旧暦正月九日)に、スフバートル、ロソル、デムベレル、ボリソフ、ツェデンイシにジャムツァラーノもくわわって、トロイツコサフスクで会議が開かれ、革命軍の組織と中国軍の駆逐が決議された。⁽²⁶⁾この会議で、国境地域から党の軍隊をつるること、モンゴル人民軍の司令官にスフバートルを任命しスフバートルの名前で募兵することがきまり、募兵のための布告文も作成された。このあと、布告文が各地におくられ、デムベレルやビリクサイハンやスフバートルの努力で、二百名近い兵士があつめられた。

ここで確認すべきは、これ以前の情報収集活動とこのときの募兵活動をはっきりと区別すべきこと、この時期まではバルチザン部隊をつくるための実質的な活動はなされていなかったことである。

一方、イルクーツクの動きに目を転じると、二一年二月十日に、コミンテルン極東代表部とモンゴル・チベットの合同会議がひらかれ、ガボン(コミンテルン全権代理)、ダヴィドヴィチ(代表部メンバー)、リンチノ

(モンゴル・チベット課長)、ダンチノフ(同課書記)の四名が出席した。この会議で、モンゴルの現状と、コミンテルン極東代表部がちかいつ将来モンゴルで実践すべき課題が検討された。議事録のなかには、前年の秋にモスクワの外務人民委員部からモンゴル代表団に対して「モンゴルに人民政権を樹立する」「モンゴルの自治を回復させる」たたいのための支援が約束されたことが、のべられている。

ロシアと中国の間で条約がむすばれるまでは、積極的な行動にはせず、党の組織活動に専念するという約束がモスクワに対してなされたことも、議事録からしられる。⁽²⁷⁾

しかし、ウンゲルン軍のフレー占領は、このような前提に変更をせまることになった。今や、モンゴルに根拠をおくウンゲルンの白軍は、沿海州のセミョーノフ軍、満州・北中国のジャン・ゾリン(張作霖)勢力とならび、ソビエト・ロシアをおびやかす「魔の緩衝地域(缓冲地帯)」を形成していた。これらの緩衝地域の破壊は、コミンテルンとソビエト・ロシアにとって重要な課題になっていた。⁽²⁸⁾

会議の決議は、モンゴルの革命家への支援をおくらせ

ることは、世界革命にとっても、ソビエトロシアにとっても重大な結果を招くと指摘している。

決議は、二月十二日に、具体的な計画の立案のための会議をひらくよう革命軍事ソビエトにもとめているが、この会議に関する資料はみつつかっていない。⁽²⁹⁾

四 モンゴル人民党第一回大会

一九二一年三月一日にはじまった会議の議題は、四つあった。すなわち、一、現状と当面の課題、二、人民軍参謀部の組織、三、参謀部規則の制定、四、人民党の目的と課題の説明。

三月一日には、十七名が参加し、ダンザンがバロン・ウングェルン軍の本質を説明し、ソビエトロシアに依拠すべきことを主張した。この問題に関して夜の十一時まで討論がなされた。

二日めの三月二日には、十九(二十)名が参加した。

前日のダンザン演説に関する議論がふたたびなされ、結局、ソビエトロシアからの援助のうけいれが承認された。続いて二番目の議題にうつり、五名からなる参謀部の設置がきめられ、三名は人民(革命)党、二名はコミ

ンテルンから選ばれることになった。従来、二名はソビエトロシアから選出されることがきまっていたと、解釈されてきた。これは、「二名は赤(wayan)から出る」という、モンゴル語の議事録の表現に引きずられたからだ。ところが、ロシア語の議事録では、「コミンテルンから二名」と明記している。⁽³⁰⁾

モンゴル側三名は、スフバートル、ビリクサイハン、ダンザンで、スフバートルが参謀長に任命された。議事録には、コミンテルン選出の二名の名前は記録されていないが、バラムソ一の回想から、ポリソフとジャムツァラーノであることがわかる。⁽³¹⁾

参謀部の機構について、ロシア語版議事録は、参謀部官房や必要な部署の組織が参謀部にゆだねられること、ダムバラブジャーとダシゼベグがそれらの管理のために任命されるべきこと、コミンテルンの代表との合意のもとに必要な人物を招聘する権利が参謀部にあたえられること、などが決められたと述べる。

最初の二日間の会議は、モンゴル人民党軍の創設という性格をつよくもっていたことに、注意をはらう必要がある。ポリソフの秘書をつとめていたデムコの回想に

よれば、二月二十一日のイルクーツクの会議で、モンゴルの革命家を支援するための顧問団の派遣がきまり、リヤッテ、ベレットイ、リトヴィンツェフら二十一名が選抜され、汽車、そりを乗りつぎ、二十八日の正午頃、トロイツコサフスクについた。ほぼ同時に大量の武器・弾薬をつんだ車輛も到着した。⁽³²⁾

四番目の議題に関連し、ダンザンとスフバートルがモンゴル人民党の目的と課題を会議参加者に説明し、入党希望者の署名をもとめた。こうして、二十名が最初の正式な党員になった。

三月三日に、党員による大会がひらかれ、二十六名が参加した。ダンザンが開会し、スフバートル、ジャムツァラーノが、議長、副議長をつとめた。議題は、一、あいさつ、二、布告文とその序文の採択、三、中央委員会の選出の三つだった。

まずコミンテルン極東書記局長シュミヤツキーに電報をうつことをきめ、次に極東書記局長のかたがきでジャムツァラーノがコミンテルンの目的と課題について説明した。そのあと、ソビエトロシア全権代表マクステネクが、祝辞をのべた。

つぎに第二の議題にうつり、ジャムツァラーノが布告文とその序文について説明し、審議をへて、若干の修正をほどこし、承認した。⁽³³⁾

三番目の議題、すなわち、中央委員会選出に関しては、ロシア語議事録の記述がよりくわしい。注目すべきは、「(きたるべき)人民革命軍によるキャフタの占領」という表現が二度つかわれ、キャフタ攻撃とその占領が前提とされていることだ。このときえらばれた執行部の任期も、キャフタ占領後なるべくはやく召集されるべき党代表者大会までとされている。⁽³⁴⁾

すでによく知られているように、中央委員会の四名のメンバーのうち、三名はモンゴル人民党からえらび、一名はコミンテルンから派遣することになり、ダンザン、ロソル、ダムバドルジが選出された。ロシア語議事録は、ダンザンが中央委員長に選出されたことを記録している(モンゴル語版には、この記録がない)。さらに中央書記には、デジドオソル(内モンゴル出身)とバダルチが任命された。⁽³⁵⁾

三月三日に採択された二種類の基本文書のうち、「大衆に対するモンゴル人民党の布告文の序文」は、全体と

して、外来語を多用した、一般大衆には難解な文体でつづられている。資本主義のうみだした矛盾、帝国主義の本質がするどく批判され、「抑圧者と被抑圧者」、「搾取者と被搾取者」の対立が激化している現実が示され、国際共産主義運動のはたす役割、社会主義思想の優位性が説明されている。

「大衆に対するモンゴル人民党の布告文」(いわゆる第一次綱領)は、「序文」に対する「本文」にあたるもので、最初から民衆にとって理解しやすい文体と表現方法でかかっている。「序文」が人民階級のおかれた状況と闘争課題、コミンテルンの支援を説明しているのに対し、「本文」はモンゴル人の民族感情にうったえた内容と表現になっている。

「布告文」によれば、モンゴル人民党の主要課題はふたつあり、ひとつは第一項でうたわれた「人民の権利の拡大」であり、もうひとつは第二項の「国家主権の回復」である。

第二項では、将来の目標として、すべてのモンゴル民族が統合され、ひとつの国家をつくるべきこと、当面は「外モンゴルの自治」を回復すべきことが、うたわれて

いる。

モンゴル人民党が実際は、単なる「自治」ではなく事実上の独立を求めていることは、前年八月の、ガボンとの会談の際の発言からあきらかである。⁽³⁶⁾「布告文」のロシア語版では、「自治」という語がつかわれず、「モンゴルの解放」という表現になっていることも、指摘しておきたい。⁽³⁷⁾

第三項は、「中華連邦」への加入の可能性をのべたもので、この項の解釈については、拙稿で言及したことがある。当時、考えられていた国際共産主義運動、近い将来、現実のものになるとおもわれていた世界革命、勤労者が権力をにぎる世界連邦という理念が背景にあることを念頭におかないと、この項は、単なる「中国への復帰」と誤解されかねない。⁽³⁸⁾

さらに当時のソビエトロシアの対中国戦略の中でモンゴルの位置付けを考慮しないわけにはいかない。ソビエトロシアは、終始一貫して、中国との関係改善を第一義的なものと考え、外モンゴルは自治国として中国の一部を構成すべきだという立場をとっていた。

極東書記局長シュミヤツキーがこの年の秋に外務人民

委員チチェーリンにあてた書簡のなかで、モンゴル人の「中国の宗主権」に対する考え方に関連して、「民主的な中華連邦を構成する独立国モンゴル」がモンゴル人の理解だと説明し、綱領(すなわち「布告文」)の第三項のほぼ全文を引用しているのは、たいへん興味深い⁽³⁹⁾。

総合的に検討してみると、第三項は、起草者ジャムツァラーノ自身の思想を反映しているというよりは、コミンテルン、ソビエトロシアの立場、政策をつよく反映しているとみるべきであろう。たとえば、一九三一年のジャムツァラーノの「自己批判書」にのべられたパンモンゴリズム思想と「布告文」の理念の間には、かなりの距離がある⁽⁴⁰⁾。中国、ロシアの勤労者の党との協力をうたった部分(第七項)や、弱小国との連帯をのべた箇所(第八項)もコミンテルンの考え方とよく合致している。

五 結語

对中国軍、対ロシア白軍というかたちでモンゴル人のたたかいが展開され、ブリヤート人革命家がそれを支援していた時期、ブリヤート人自身の自治運動も進行しつつあった。

一九二一年四月二十七日づけの、コミンテルン極東書記局からオムスクのシベリア革命委員会にあてられた、公用電報の形式をとる文書は、当時のジャムツァラーノやリンチノやツェデンイシが、ブリヤート人の自治運動のなかではたしていた役割をしるうえで、たいへん貴重な資料である。

同文書は、極東共和国のブリヤート・モンゴル人の一九二〇年五、六月の大会の決定、ソビエトロシアのブリヤート・モンゴル人の一九二〇年十月の大会の決定、そして一九二〇十月十四日のロシア共産党中央委員会政治局の承認と、地方の党機関、ソビエト機関の同意にもとづき、「臨時の文化的・民族的最高機関」(высший временный культурно-национальный орган)としての「東シベリア・ブリヤート・モンゴル中央委員会」(Центральный комитет бурят-монголов Восточной Сибири)の設立をつたえている⁽⁴¹⁾。

電文によれば、「同中央委員会の中央委員には、ツェウエーン・ジャムツァラーノ、エルベクドルジ・リンチノ(両名は、コミンテルン極東書記局の主要な活動家)、ミハイリ・エルバーノフ(ロシア共産党員、イルクーツ

ク県執行委員会土地局長)、中央委員候補には、ダシビロフ(極東書記局活動家)、アマガーエフ(ロシア共産党員、アングラハアイマク執行委員会議長)が、それぞれえらばれた。

ロシア二月革命後に成立したブリヤート民族委員会の再現ともいえる「東シベリアリブリヤートン・モンゴル中央委員会」の中央委員にブリヤート民族委員会の議長をつとめたジャムツァラーノヤリンチノが選ばれたのは、ある意味では当然だ。とはいえ、かれらがボリシェヴィキたちと伍する力を、この段階でも有していたことは、やはり注目される。

文書に署名しているのは、アマガーエフ、イェルバーノフ、リンチノの三名のみである。これは、おそらく、ジャムツァラーノとツエデンイシ(ダシビロフ)がキャフタかかくにいて、イルクーツクにはいなかったことと直接関係があるう。

シュルノフによれば、同委員会のメンバーは、五月五日にシベリア革命委員会によって承認され、五月八日に、あらためて組織委員会が召集された。⁽⁴²⁾

同中央委員会の目的は、文化的・民族的要求の充足、

大衆の政治的教育、とりわけブリヤートン・モンゴル人勤労者代表大会の召集とソビエトロシア、極東共和国両政府の話し合いによる、ブリヤートン・モンゴル人の自治の実現だった。

要するに、当時のブリヤート人革命家は、一方でブリヤート人の統合と自治のためにたたかいて、他方で外モンゴルの独立(自治)のためにたたかっていたことになる。これを可能にしたひとつの要因が、コミンテルンの存在であったことは、疑いないだろう。また、極東共和国という緩衝国家をつくらなければならない程まだ力の弱かったソビエトロシアやロシア共産党と、モンゴルやブリヤートの民族主義者の間の矛盾が顕在化していなかったことも、ブリヤート人革命家にとって有利に作用したとおもわれる。

冒頭で紹介したリンチェンの自伝にもどると、父親ビムバエフは、イルクーツクの東方諸民族部、極東書記局が一九二〇、二一年に刊行していたモンゴル語の新聞『モンゴリオン・ウネン』にも寄稿したことがあるという。⁽⁴³⁾

リンチノらと一緒に一九一九年二、三月のパンモンゴ

リストの会議(チタ)にも参加したビムバエフのような民族主義者ともつながりがあった点に、東方諸民族部や極東書記局の対モンゴル活動の性格がよくあらわれているといえよう。

- (1) Аким 1990, 13.
- (2) Ширэндэв 1969, 229. Коминтерн ба Монгол, 429.
- (3) Gelegseuge 1928, 233.
- (4) Монголын хувьсгалчдын түүхт зөвлөгөөн, 20.
- (5) Ibid., 5-6.
- (6) Шямツафаринについては、田中(一九九〇年)の第六章参照。
- (7) Коминтерн ба Монгол, 426.
- (8) Ibid., 418.
- (9) Ibid., 430. シベリア局に対する不満と東方諸民族部のコミンテルンの部局への再編成の要望は、十二月二十一日づけの「ブロンシュテイン(東方諸民族部副部長)「アブラムソン(中国課長)の書簡にもみられる。ВКП(6), Коминтерн и Китай, 55.
- (10) Лузянин 1995, 72.
- (11) РЦХИДНИ, 495-154-89, 2.
- (12) Ibid., 495-152-8, 3, 9.
- (13) Коминтерн ба Монгол, 24.

- (14) Ibid., 27.
- (15) Ардын журамт цэргийн түүхэн ялалт, 25-26.
- (16) 磯野富士子氏は、文書がモンゴル側の独自の判断によって出されたとしているが、うたがわしい。磯野(一九八一年)「一五八頁。
- (17) 手書きのもの(РЦХИДНИ, 495-152-3, 16-19)とタイプ版(495-152-3, 20)の二種類があり、タイプ版には地名、人名にスペリングの誤りがみられ、一部脱落箇所もある。特にタイプ版は「ユチツキー(ツェデンインシ)のサインを欠く。『コミンテルンとモンゴル』の註には文書の一部が引用されているが、タイプ版を用いたため、無署名としてしまっている。Коминтерн ба Монгол, 431.
- (18) ダシが、『発端と成就』の註に引用した党中央文書館所蔵の文書と内容と日付(一九二〇年十一月末)が一致する(Даш, Тайлбар, 298)。よってダシ引用の文書は「ツェンインシ」の報告に相違なく。
- (19) РЦХИДНИ, 495-152-3, 17a.
- (20) Ibid., 495-154-89, 3. Коминтерн ба Монголにキنگール語訳がおさめられている。議事録に本来、日付はないが、同書の編者は「フルトマンが十一月十七日に死亡している」ので会議は十一月十七日以前にひらかれたとする。しかし「他の資料から判断して」「十一月」は「十二月」の誤りである。ルズヤニンは「まったくおなじ文書を引用し、どういう根拠か、日付を十二月十七日としている」。Лузянин 1995, 72.

- (21) РЛХИДНИ, 495-152-3, 18, 18a.
- (22) Ibid., 495-154-89, 3, 495-152-3, 17.
- (23) Ibid., 495-154-89, 3.
- (24) Demberel 1931, 13.
- (25) Balmusu 1928, 111.
- (26) Demberel 1931, 29-30.
- (27) РЛХИДНИ, 495-154-89, 2.
- (28) Ibid., 495-154-89, 2a.
- (29) テーウエンツ氏は「ダシの著作などにより」この二月十日の会議の重要性を指摘している (Ewing 1980, 227)。ただし、武器・軍事教官の提供等の援助の決定は、同氏の推定するように二月十日にはなく、二月十二日に予定されていた会議でなされたとみたほうが、自然だ。
- (30) Монголын хувьсгалчдын түүхт зөвлөлтөөн, 60, 115.
- (31) Balmusu 1928, 115.
- (32) Демко 1981, 13-16. ただし、これらの日付が完全に正しいかどうかは、検証する必要がある。
- (33) Монголын хувьсгалчдын түүхт зөвлөлтөөн, 62, 119.
- (34) Ibid., 63, 120.
- (35) テシトオソルは「リーリン右旗出身 (Ibid., 15)」。一九一一年のイェフレーの独立宣言後、外モンゴルへ移住した内モンゴル人のひとりである。
- (36) Коминтерн ба Монгол, 16.

(37) Монголын хувьсгалчдын түүхт зөвлөлтөөн, 141. なおロシアンテルンの機関誌に掲載されたロシア語版は「シヤムツァラーノ」が起草した原案の可能性があると、筆者はかんがえている。

(38) 二本 (一九八四年)「三七六〜三七八頁」。

(39) Коминтерн ба Монгол, 43.

(40) Өргөсөн бичиг, 57-58.

(41) РЛХИДНИ, 495-152-8, 33.

(42) Шулунов 1972, 122. なおシヤルノフは、同委員会がロシア共産党中央執行委員会委員会の決定 (一九二一年四月二十五日) に基づき創設され、議長にはイェルバーノフ、副議長にはアマガリーエフが選出されたとのべる。非黨員のシヤムツァラーノ、リンチノ、ツェデンイシの名前が故意に削除されていることを、指摘しておきたい。

(43) Аким 1990, 9.

文献一覧

РЛХИДНИ: Российский центр хранения и изучения документов новейшей истории

Монголын хувьсгалчдын түүхт зөвлөлтөөн: Г. Дашнам, З. Донжид, Монголын хувьсгалчдын түүхт зөвлөлтөөн, 1921 оны гуравдугаар сарын 1-3 (Ундсан баримт бичиг), Улаанбаатар, 1996.

Коминтерн ба Монгол: Монгол улсын архивын хэрэг зүрхлэх газар, Оросын төрийн архивын алба, Комин-

терн ба Монгол, Улаанбаатар, 1996.

ВКП (б), Коминтерн и Китай: ВКП (б), Коминтерн и национально-революционное движение в Китае, Документы, Т. 1, 1920-1925, Москва, 1994.

Ардын журамт цэрийн түүхэн ялагт: Б. Балжир-гарам, Ардын журамт цэрийн түүхэн ялагт, Баримтын эмхтгэл, 1920-1924 он, Улаанбаатар, 1980.

Аким 1990: Г. Аким, Билгүүн номч Бямбын Ринчен, Улаанбаатар, 1990.

Даш, Тайлбар: Д. Даш, Тайлбар (Х. Чойбалсан, Д. Лосол, Г. Дамид, Монгол ардын үндэсний хувьсгалын анх үүсэж байгуулагдсан товч түүх, Хоёр дахь удаагийн хэвлэл, Улаанбаатар, 1979)

Демко 1981: И. Г. Демко, Ардын хувьсгалын үйл хэргийн төлөө, Орч. Д. Даш, Улаанбаатар, 1981.

Луванин 1995: С. Луванин, Монголия: между Китаем и Советской Россией (1920-1924), «Проблемы Дальнего Востока» 1995, 2.

Өргөсөн бичиг: Жамсраны Цэнээн (Багзэв) -ээс өргөсөн бичиг, «Манай индэр» 1991, 4.

Ширэндэв 1969: Б. Ширэндэв, Монгол ардын хувьсгалын түүх, Улаанбаатар, 1969.

Шулунув 1972: Н. Д. Шулунов, Становление советской национальной государственности в Бурятии (1919-1923 годы), Улан-Удэ, 1972.

Balamsu 1928: Balamsu, "Nam-un anggaduyar uеke qural-i quralduqu ёar ёyes-ün bayidal-un tuqai," (Mongol arad-un qubisqaltu nam-un töb qorü-a, Mongol arad-un qubisqal-un teike-dür qolbor dal büküi jüi-üd, Ulaanbatatur, 1928)

Demberel 1931: Demberel, *Mongrol arad-un qubisqaltu nam-un nigediger qural*, Dagedü Üde, 1931.

Gelegssenge 1928: Gelegssenge, "Nam-un qorü-a egür-üd kerkin bayülpurduu ulamara nemegdegseu tuqai," (Mongrol arad-un qubisqaltu nam-un töb qorü-a, Mongrol arad-un qubisqal-un teike-dür qolbor dal büküi jüi-üd, Ulaanbatatur, 1928)

Ewing 1980: Thomas E. Ewing, *Between the Hammer and the Anvil? Chinese and Russian Policies in Outer Mongolia 1911-1921*, Bloomington, 1980.

磯野 (一九八一年): 磯野富士子「シンチル革命に対するエントロピーの軍事介入について」『東洋学報』六二—三・四 (一九八一年)

田中 (一九九〇年): 田中克彦『草原の革命家たち モンゴル独立への道』(増補改訂版 中公新書 一九九〇年) 二木 (一九八四年): 二木博史「タムバートル政権の内モンゴル革命援助」『一橋論叢』九二—三 (一九八四年)

(東京外国語大学教授)